

真継鋳物師の分布と残存形態

板倉勝高

はじめに

一 問題の所在

二 真継鋳物師について

三 真継鋳物師の分布

(一) 分布状況

(二) 表現上の問題

(三) 欠如地域

四 近江辻村の鋳物師

五 鋳物師屋敷の復原

六 関東周辺の真継鋳物師

七 現在の鋳物工業地域と真継鋳物師の残存地区との対比

まとめ

はじめに

世界各地の工業地域は、原則的には農業社会の或程度の成熟の上に流通経済が発達し、それによって工業生産がう

ながされて、工業地域の展開をみるにいたったと考えられる。したがって後進地域の工業化は、進歩した工業技術と、時には資本の輸入によってのみ可能なものではなく、一つには工業製品の生産流通体系と、新しい技術を入れるにたるだけの伝統在来工業の技術力が必要だったのではなからうか。日本の繊維工業はイギリスの綿紡績の技術によって近代工業化の途についたものであるが、そのためにはすでに広汎に展開していた織物業の生産流通体系と自らの力でガウ紡機を発明するだけの蓄積された技術力が必要であった。

しかし金属、機械工業の分野では、伝統・在来工業から近代工業の転化が明らかにされていない。本研究は鑄物工業の場合をとりあげて、この問題にアプローチしたいと思う。

一 問題の所在

近代工業の主軸が機械工業にあることを疑う人は少ないであろう。ところが機械工業は主体部分にあたる企画、設計、組立などの総括的部分と、これらの組立ての素材である部品を製造することは、必ずしも同じ企業内では行われず、主として同一地域内でも元方下請の関連関係に依存していることはよく知られている。これらの機械工業下請地域^①を形成する部門としては、鋳螺、鑄物、ばね、熱処理、鍛工、プレス、塗装、機械加工などがあげられるが、この中で直接前代からの遺産が問題となりうるものは鑄物と鍛工である。私はかねてから近代工業地域の母胎としての鑄物産地（鑄物工業地区）がどこにあり、それらが現代の鑄物工業地区にどのように引きつがれているのか、いないのかをたしかめて、機械工業地域形成のために伝統・在来工業の果たした役割を考察する第一歩としたいと考えていた。

ところが五年程前に、中居と高岡の鋳物業を研究したとき^⑧に、中世・近世を通じて諸国の鋳物師を差配したといふ京都の真継家が出した「鋳物師職座法之掟」など、それを示す一連の文書があることを知った。真継家については豊田武^⑨、香取秀真^⑩らがとりあげ、各地の研究者^⑪もそれぞれ残存の文書をかかげて、説明をしている。

私は真継鋳物師の分布を知れば、古い鋳物地域を確かめるのではないかと考え真継鋳物師の名簿を求め、これから昔の鋳物工業地区を検出し、現代の鋳物工業地域と対照し、これらの系譜をたしかめて、現代の機械工業地域との関連を考えたいと考えたのである。

二 真継鋳物師について

諸国の鋳物師の多くが、諸役免除、諸国往来、一国一郡の独占をみとめた藏人所牒などの贖文書を持ち、禁裡御鋳物師、あるいは御鋳物師と称して明治まで菊の御紋章をかかげていたことは柳田国男^⑫がまず指摘している。この贖文書というのは一連の書類を京都真継家が代替り毎に各地の鋳物師から呈出させて、その度に書替をして渡していたので地方文書にあるものは正確には贖文書のコピーである。なぜ真継家がこのような贖文書をつくりあげ、これを基礎に諸国の鋳物師を形式的にも差配できるようにしたかという点は興味深いが、本稿では深くはたちいらず、前記のべた目的に必要な程度だけ真継家のことを記しておく。

鋳物師の多くが持っている真継家の文書は、

1 鋳物師職座法掟 天正四年（一五七六）

2 藏人所牒仁安二年（一一六七）天福元年（一一三三）暦応五年（一三四二）など

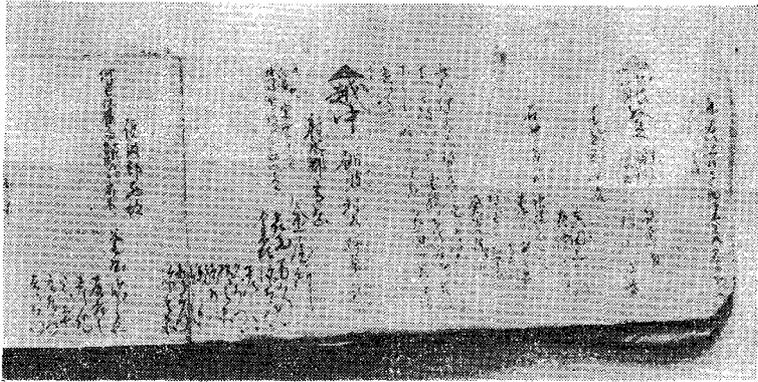


写真1 真継家台帳のうち古い方の「能登中居の条」

5 鋳物師由緒、年代なし

4 継目許状（各鋳物師継目の許可状）

の四種類が基本的なもので、特に贋文書だとされるのは2の蔵人所牒^⑥の写である。鋳物師由緒^⑤には河内国日置荘の鋳物師が勅許鋳物師として諸国に散在し、その末孫に鋳物業がみとめられたことを記し、これを基盤にして真継家は中世近世を通じて、鋳物師の掌握につとめ、天正四年には「鋳物師職座法之掟」を示し得る程の力を持つにいたったらしい。

宮下史明^⑦は「真継家が鋳物師を支配するようになったのは応永二〇年（一四二二）に北陸の鋳物師のために課役免除の運動をしたことからである」と記している^⑧が、その根拠史料は示していない。香取秀真も「或一部の鋳物師のために御蔵定弘という者が応永廿年に課役免除の運動をしたことがあって以来の縁故であるらしい。」としているがその出典は不明である。ともかく室町中期頃から真継家と鋳物師との間に特別な関係を生じたことは事実である。

真継家は紀氏であり蔵人所小舎家四家の一家であった^⑨。地下家だからそれ程身分の高いものではない。初代則弘から三〇代能弘までの系図

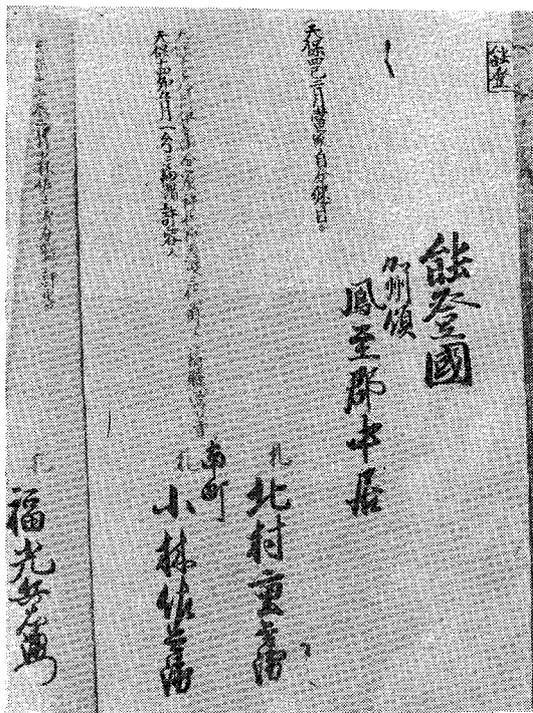


写真2 真継家台帳の新しい方の「能登中居の条」
(諸国鋳物師名寄記)

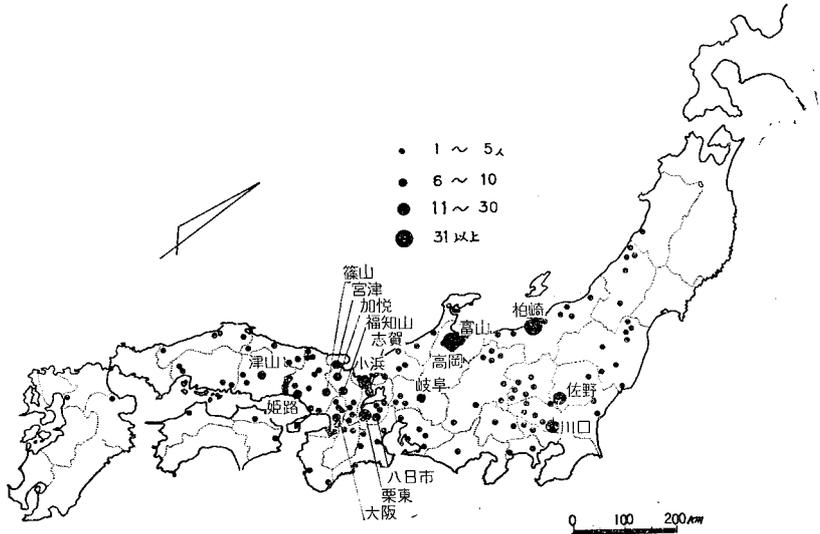
があるが、定弘という人は見当らない。一二代安弘のことであろうか、安弘は後花園天皇の頃の人で応永年代には近いのである。

この真継家の文書は現在名古屋大学文学部の所属になっており、その中に真継鋳物師の登録台帳と思われるものが少くとも二冊はあった。写真には能登中居のところを新旧合せて対比しておいた。私はこのうち新しい方の文政一一年改、諸国鋳物師名前帳とあるものを基礎資料とし、地方の鋳物師の資

料と対比しながらこの研究をおこなった。

真継鋳物師の名簿は現在、真継の台帳と思われるものが前記の二冊の他国立博物館蔵の由緒鋳物師人名録がある。

これは明らかに諸国鋳物師名寄記（文政一一年から嘉永五年まで）の次に位するもので、嘉永五年から明治二〇年頃までの注記がある。しかし現実の差配は明治初年までであったらしい。名古屋大学の古い方は、文化の年代が記されておられるいは諸国名前帳の直前の台帳であるかもしれない。



第1図 全国分布図

この三冊の他に写本として伝えられるものには川口教育委員会蔵（文久三年）、茨城県真壁町小田部助左衛門家蔵（天文一八歳改分）、川口市小川家所蔵（嘉永七年写天文一八年）これらは同じ時期の写本と思われる。大阪府美原町、光田源太郎家蔵年代不詳（寛政以後）の③三種四冊があり、まだ充分検討されていない。これらの写真撮影がみとめられ、地区毎の台帳が完備されれば、鑄物地域の研究は一段と進展するであろう。

諸国鑄物師名寄記（或は名前帳）については、鑄物師の所在地を現在の地名と対応させ人名を所在地毎に整理して流通論集三巻の一④に発表してある。これによって鑄物師の分布図を作製し第一図⑤をえた。本稿は主としてこの分布図に基づき考察をすすめる。

三 真継鑄物師の分布

（一）分布状況 諸国鑄物師名前帳は文政一一年から嘉永五年までの台帳であるから、分布図は嘉永五年（一八五二）

の全国的状況と理解しなければならぬ。鋳物師の所在地は二〇〇、人員は四九三人である。大部分は一地区一、二人で、四人以上のところは、二五地区にすぎない。とりわけ大きな集団地は、高岡五四人、柏崎四六人、小浜二五人、佐野二一人、滋賀県栗東町辻一四人、川口一二人である。

ついで五人～八人のところが、茨城県真壁町、滋賀県八日市町、綾部市、福知山市、篠山市、宮津市、京都府加悦町、兵庫県出石町、姫路市（野里）、津山市、香川県山本町、滋賀県志賀町、富山市の一四地区、四人というのが敦賀市、富山県戸出町、高田市、鳥取県用ケ瀬町、三木市の五地区である。三人の地区は奈良市鍋屋町、奈良県香芝村（五位堂）など一八ヶ所ある。

この中で北陸を主として日本海沿岸方面には高岡、柏崎、小浜の三大集団をはじめとして綾部、福知山、篠山、宮津、加悦、出石、敦賀、高田、用ケ瀬の一二地区があり、宮下史明や香取秀真の真継差配北陸起源説を首肯せしめるものがある。北陸筋にはこのような大集団地のほかに一～三人の小集団地の数も多い。北陸については京都の周辺である滋賀県には栗東町・八日市・志賀のほか五地区あり、京都府では亀岡市に三地区に分れて六人ある。近江・丹波・但馬・播磨も多く、和泉と摂津で一六地区を数えている。京都自体では二地区二人しかないが、周辺は多い。北陸と京都周辺は特別に真継鋳物師の多い地域である。

今人数にかかわらず地区単位で集計してみると近畿が六五、北陸が三二、関東二七、東北一九であるが、東北は山形県五、福島県一三、秋田県一である。そこで山形県と秋田県を北陸（日本海沿い）に福島県と長野山梨両県を関東周辺として合算すると近畿六五、関東周辺五一、北陸三二となり三大集団地である。

しかしこのような数で軽重を考へることは諸国鋳物師名寄記の表現上の問題を考へ合せなければならない。

(二) 表現上の問題 第1図をみると明らかに昔から鑄物の大産地であったところで、鑄物師一、二名しか記録されていなく、江戸には全くなく、大阪にも余りない。三都については後に述べるとして、東北、西国に余りに少ない。また小浜や柏崎など、今日特に鑄物産地と思われないうところに、大きな人数が記されているのは実際にそれだけの鑄物師が所在したのであるうか疑問に思われる。

山形市銅町は新羅三郎義光に従って移り住んだという伝統をもつ古い産地であるが、名前帳には一人しかなく、川口には文久元年に二三軒[㊤]あったとされているが、その一〇年前の名前帳には一二人しかない。三都については問題があるが、京都三条釜座^{かまご}には和田吉兵衛唯一人を記載してある。

銅町は前記光田本には洞町（銅町の誤記であろう）佐藤金重郎以下一四人を記してあり、名寄記は佐藤金十郎一人をのせてある。銅町の歴史についてはよく分らないが、長期間多数の鑄物師が同時に作業をしていたことはほぼ確実であるから、或時期には銅町所在の大部分が記録され、或時期にはその代表者だけが真継家と連絡をしたものであるかもしれない。

京都の鑄物師については香取秀真が一三二人の鑄工についての記録[㊤]となお若干の補遺をつけており、三条釜座の他にもいくつかの鑄物師がいたことはあきらかになっている。しかも三条釜座の人数は一説によれば座衆八八人とい、釜師七二人というからかなりの数であったらしい、和田吉兵衛は座中名を得し者であったが[㊤]、名越家や西村家のような勢力をもつてはいなかったであろう。

三条釜座の鑄物師については光田本のその箇所に、三条釜座名越駿右衛門、和田吉兵衛以下一三名の名を列挙してあり、その後釜座鑄物師は南都大仏建立に付百済国から渡った子孫で、河内国日置荘内鑄物師とは別の系統のもの

だが正徳五年（一七一五）までは真継家に相勤めた。しかしその後真継家支配にあらずというと言い書いてある。由緒鑄物師人名録にも同じような記載がある。これには綾小路室町名越弥兵衛門とあり、次に三条釜座、和田吉兵衛とあり、他に七人小さく記してあるから、特別のあつかいである。

このような有様で真継家の権威というものは、あまり確立されたものではなく、同じ京都の釜座からは無視されていたらしい。和田吉兵衛は真継家差配の播州宍粟郡金尾村（現山崎町）の長谷川孫兵衛と出入をしたことがあり、その後釜座の中から一人だけ真継家の台帳に記されていたものであろう。和田吉兵衛については名前帳では弘化四年に継目をしたという記録がある。

また静岡県森町の山田七郎左衛門家についてみると、名前帳には山田一人であるが、地方文書には天正一六年森大郷、鑄物師屋敷三人大工居とある。大工とは鑄物師のことである。山田は家康の駿遠両国鑄物師総大工職の朱印状をもっていたから、両国の鑄物師もこの支配下にあったということになる。

もっとも光田本には山田家の他田中姓の鑄物師が遠江に二人、騷河に一人を記載しており、東海鑄物史稿は^⑧、山田と田中の間に争証があったことを伝えている。ただし三人の田中は近江辻村（栗東町）からの出職であったので山田家は、真継家を使わずに、家康の朱印状を証拠にして争っている。いづれにしても駿遠二国で一人三人の鑄物師でたりるわけではないから、これも山田一人が代表で、他に何人かの鑄物師がいたのであろう。

要するに、山形・京都・森のような例は他にもあって、名前帳には一人でも実際には沢山の鑄物師があり、またあるグループの中の若干だけが登録されていたと思われる川口のような例もあった。

また逆に高岡などは五四人もあり、五四人が全部鑄物師の頭梁として五二〇人の部下をひきいて毎日作業をした

とは考えられない。高岡の鋳物師の数は文政一年に高岡築城に際して前田利長に呼ばれて西部金屋から移住した七人衆の他に当職三二人、休職一〇余人^⑧とあり、実動は三八人である。色々な資料から、争証などに際して職人の一部まで、名前を書き出した例はあるが、大体四〇人位であったと思われる。また文政一〇年には金屋町の戸数二〇〇余戸、工場（吹屋のことか）一二ともいう。やはり五四人は多すぎるようで実際に鋳物師の仕事をしていない者も登録だけはしていたのであろう。

また若狭國小浜は名前帳では実に二五人を数えており、由緒鋳物師人名録もほぼ同数ある。ところが光田本には、小浜・国松某、ヲニウ金屋村惣代文次、吉郎右衛門とだけある。国松某は、近江辻村の項に小浜に出職とある。小浜金屋村というのは江戸時代からの小浜市街地とははなれており、国分寺や文化財の多い一隅にある。国松は小浜の町にいたものであろう。問題はヲニウ金屋達（遠敷郡おぢくの金屋という意味）でこの二五人の中に国松姓のものは見当らない。

ところがこの金屋村（現小浜市金屋）というところはきわめて狭い部落で、現在大半が農家である。現在は鋳物の業はたえているが、昭和三〇年頃までは稼動していた。しかし作業自体はこの二五人の子孫がしていたわけではなく、周辺の農村からの通勤職人によって製品をつくらせ、これを持って行商をしたのである。

以前には自ら作業をしたのではないかと考えて、色々聞込みを試みたが、そうらしい返事は得られなかった。作業場は一ヶ所であった。それでもこの部落には沢山真継関係の文書は保存されているらしく、私も数種を見ることができた。この遠敷金屋村では商売のために真継鋳物師の許状を所持していたわけである。

二〇〇地区の中には、銅町や遠敷金屋のような例も他にあるのではないかと考えられる。それ故、名前帳の人数を

数字的に云々するのは危険なことで、ただ二〇〇地区は、恐らく鋳物師が所在した場所であると認識して、実証調査によって、確証を得なければなるまい。

(四) 欠如地域 ごく大まかにみて江戸名古屋には全くなく東北地方の北部と九州、四国の大部分には殆ど真継鋳物師はみられず、中国地方も西部の方は少ない。また中世以来知られた筑前芦屋や大和下田、それに真継鋳物師発生の地である河内国丹南にも全くない。江戸の日用品鋳物(鍋・釜)については、川口から多量に供給されたであろうし、その前には高価な鍋釜より土鍋の使用が多かったかもしれないが、全く鋳物師がいなかったわけではない。むしろ相当数の鋳物師が居住していた筈で、神田明神には天明二年(一七八二)に八〇人の江戸鋳物師が、共同で寄進した手水鉢が関東大震災まであったという。また武鑑を入念に調べると三〇〜八〇人の江戸鋳物師の名前が記されてあるともいう。また神田鍛冶町には鋳物師が居住し、作業を行っていたとも伝えられている^⑧。香取秀真は、燈籠・地藏・大仏・擬宝珠・手水鉢などの作品に刻込まれた銘を手掛りに、多くの江戸在住の鋳物師を検証している^⑨。

しかしこれらは美術品の生産者であり、日用品鋳物については江戸深川に田中釜六、太田釜七の両家があったと伝えられるのみである。この両家の名は光田本には記されており、近江辻村からの出職であるとしている。江東区史その他も^⑩、寛永一七年(一六四〇)に近江から江戸に出府してはじめ芝の海岸で鋳物をつくり増上寺の境内の拡張のため深川に移ったという。その跡は今日釜屋堀公園になっている。はじめは真継家と連絡のあった両家も、いつか関係が疎遠になったものであろう。太田家は震災まで、田中家は空襲で焼かれるまでその業をつづけていたという。この両家は名家としてきこえ、生産量も多かったであろうが、江戸中の日用品鋳物が、ここ二軒だけで充足したとは思えない。

通常江戸鑄物師の起源は家康築城の時に、佐野から六人の鑄物師を召出したといい、京都の名越・大西・堀などの名工も江戸に居住したという。東京に残る名品の中に京都の鑄物師の在銘のものが多いことは香取秀真の指摘するところである。そうすると近江・佐野・京都をはじめその他の産地からも相当多くの鑄物師が出職をして居住したものである。それらは真継となぜ関係を持たなかったか。また持ついても疎遠になったのであろうか。

安永四年（一七七五）に真継家が幕府に「真継家は先祖から諸国鑄物師之支配を仕っているから諸国鑄物師をして座法の通り相続し度に上京し、継目の許状を請い、その統制に服すべきである」と申立てた[㊦]。ところがこれを調査したところ、幕府御賄方、御細工所御用相勤候権名土佐、木村將監をはじめ、京都三条釜座之者共、并山城國中、遠州森町七郎左衛門、奥州会津城下和左衛門、摂州式拾六株の鑄物師らに問合せたが、長年にわたりその事実がないことが分つたから御沙汰におよび難しと翌安永五年に判決された。したがって天領に関するかぎりは公然と真継の支配をうける必要はなくなつたわけである。摂州にも式拾六人のグループがあつたことになる。

諸国鑄物師が真継家に登録すると代替り毎に旧書を写出して書替料を差出すほか、年始、八朔毎に銀一枚づつの上納、御即位毎に先例に任じ燈籠の献上などの義務を負うが、一国一郡の独占権、と禁裡御用鑄物師の信用を得ることができる。一国一郡の独占権は幕府、各藩がみとめなければ意味はないが、高岡などでは安永五年の決定以後でも真継に間合わせて藩が真継以外のものがタタラを吹くことを停止させている[㊧]。しかしそのような理由の勝訴は或は例外的なことであつたかもしれない。これは名古屋大学所蔵の真継家文書が整理されれば明らかになるであろう。

それ故真継家差配下の鑄物師からうける利益は、家柄の正しさを誇り、禁裡御用の名声による信用の増加しかなく、つまりは宣伝の具に供する以外にはない。したがって公儀お膝元である江戸では禁裡御用の看板は必要でなく、

太田・田中氏も真継から離れたのであろう。甲府・駿府には全くなく、奈良や大阪に若干あるのは、それらのところでは少しは禁裡御用の価値があった為であらう。

河内国丹南郡日置荘、鋳物師発生の地である筈の日置荘に真継鋳物師が全くなく、今日この地には鋳物師は見当たらない。日置荘の荘域は明らかでないが、大阪府堺市に日置荘という字があり、金岡神社があつて昔時銅造の痕跡と考えられ、その隣の南河内郡美原町字大保だいほの鍋宮大明神があつて荘民の中心であつたという。前記光田氏はこの大保の人であり美原町大保部落では最近廃絶していた鍋宮大明神の旧跡を記念する碑をたてた。

荘園としての日置荘は荘園志料にもなく、吉田東伍の地名辞書にもないので本所も領家もわからず、真継家と日置荘をつなぐ史料は何もない。鍋宮大明神も近在ではあるが二回程位置をかえたらしく、社やしろ自体もなくなっている。真継家は同社の神官であつたというが、大阪府名勝天然記念物第一冊四九七〇頁に、「同大明神に関する記録古文書は、曾て同社の神主たりし真継家に今も存する由なるが、その写は大保に現存せり」とある。徳川後期に真継家自身が自らを権威づけるために行った工作ではあるまいか。河内国丹南郡の鋳物師の所在地はいずれにしても伝説に属することだから、名寄記にそれがでてこないのは当然であらう。

名古屋、名古屋の鋳物師として著名なものは水野太郎左衛門家であり、永禄五年（一五六二）信長から鋳物師職並二門次の諸質御段所等御名除之御黒印を得ている〇。春日井郡上野村から、清須へ、清須から名古屋に移転し、その都度「其節所々罷在候鋳物職之者共、召連引越申候」とあるから相当数の配下鋳物師があつたらしい。同家はその後慶長三年（一五九八）福島正則など、代々の領主から黒印状を得ている。それ故鋳物師は真継家に属するよりも水野家に従わなければならなかった。

東北・九州・四国など、国土の縁辺部分には比較的分布が少ない。この種の欠如地域は現在の工業低開発地域と略一致しているのは偶然だけなのであろうか。

真継文書の内容はくわしく分析はされていないけれども、名古屋大学彌永教授によれば、真継家は内氏と近縁関係にあったらしいと伝えられるが、周防、長門二国には、小郡一ヶ所しかなく、出雲や因幡には少しあるが、鉄産地の近くのなにも真継鑄物師は少ない。また東北では南部鉄の供給圏と思はれるところに全く真継鑄物師がみられない。或はこれらは別のグループが存在したのかも知れない。

しかし全体的にみると戦国時代の支配領域の隆替がこの分布に何等かの影響を与えているのではないかと思われる。たしかに辺境の大大名、つまり伊達・佐竹・山内・島津・鍋島・松浦の雄藩には真継家の支配は及んではいない。加賀百万石の高岡は例外であるし、また辺境地域ではない。

しかし欠如地域の中に鑄物師が全くいなかったとは考えられず、或はこれらの辺境地域にあっては経済段階が低かったため、この地域の鑄物は柳田国男^⑧のいう「歩き筋」であったかもしれない。鑄物地域をみると近世全般にかけて大体名前帳の地区などは固定していたらしく、強制的に移動させられても、風上をきらって城下町の風下に移されるようなケースで、柳田国男が考えたような、ジプシー的な流浪の民ではなかった。

しかし柳田国男にとってこの鑄物師ジプシー説は、その民俗学の出発点ともいえるべき重要な発想のポイントであったことは戦後出版の「炭焼日記」^⑨の序文にもみえている。しかしその中で、炭焼小太郎の伝説、真野長者の伝説が周辺地域に多いと記してある。大まかな真継鑄物師の分布範囲では鑄物師は固定化しており、周辺部分では「歩き筋」で、キャラバンを組んで移動していたとも考えられる。柳田は江戸の鑄物師も歩き筋であったように理解してい

るか、江戸の鋳物師は出職であっても、流浪の民ではない。しかし新開地だから必ず遠からおいでにおいもやさん^⑧である。こう考えると江戸の手まり唄の意味もわかり出職者の定住とも矛盾はしない。

四 近江辻村の鋳物師

真継鋳物師二〇〇ヶ所の中で異色であるのは近江辻村（栗東町）で普通に記してあるのは太田角兵衛、同庄兵衛など五名であるが、その次に右之外出職者として、三州平坂岡崎・大洗（碧南市）美濃笠松・新瀉・丹後田辺・金沢の七ヶ所九人を記録している。これは光田本によると更にくわしく沢山出職者がある。上記の他松本・八幡（児玉金屋だろ）大垣・美濃長浜・長岡・出羽坂田・伊勢桑名・同川崎・江戸深川（前記・田中・太田）・中山（三重河芸村か）・遠州見付・駿河大谷・若狭小浜・城之崎・大津別所村の一五ヶ所、これに場所は書いてないが芥田五郎衛門があり、これは播州姫路（野里）であるから、一六ヶ所で、合計二三ヶ所二八人である。この他一四人休職但三六人組之内なりとある、辻村三六人組というものがあつたらしい。他に出職や転住の知られるものは、佐野から上田にかわつた小島家や福知山から甲斐国郡内新田村にきた安達家などの例はあるが割合に少ない。辻村の鋳物師についての研究は次の機会にゆづりたい。

五 鋳物師屋敷の復原

鋳物師といわれるのは通常鋳物師集団の頭梁のことである。若狭遠敷金屋の場合は例外である。実際の作業は頭梁の他に炭焚・怪留・湯入掛・手伝などの階層組織をもつ鋳物労働者と、最底五人位のタタラ踏みของทีมを維持しな

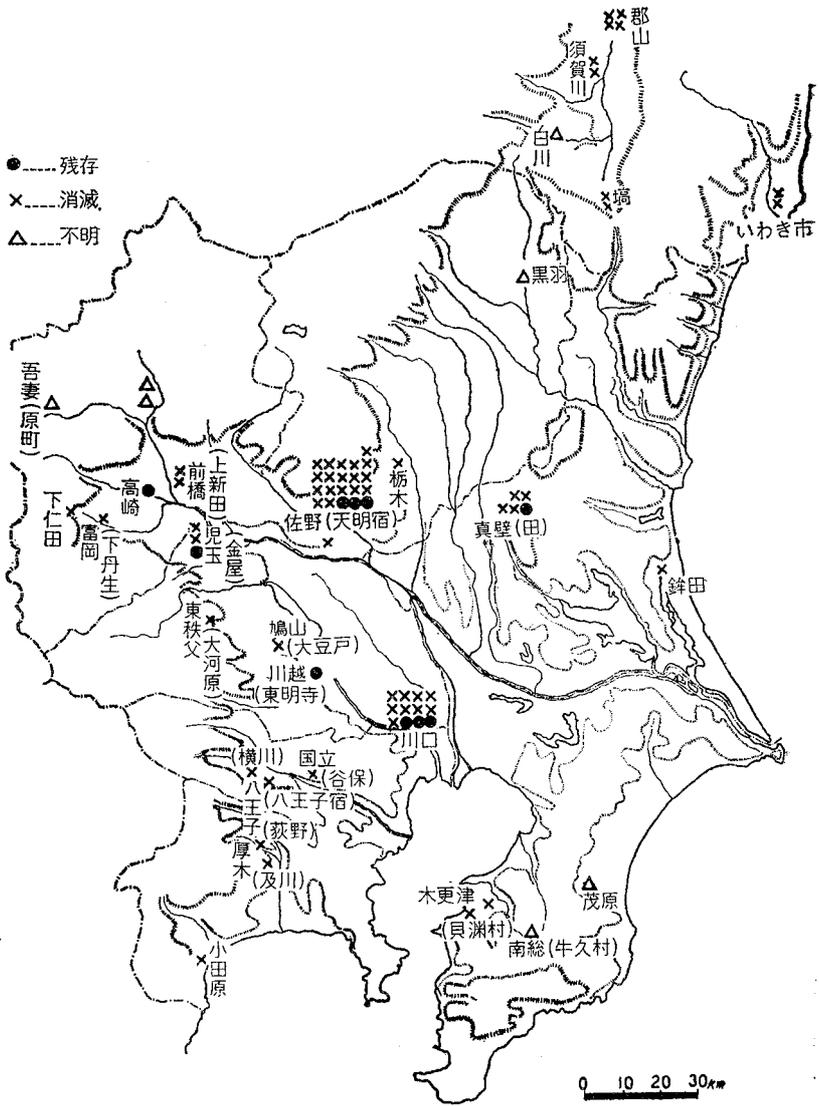
鍍座・釜座などと呼ぶ。昔は木型をそれぞれの作業場の中に棚を釣り下げて、そこに置いたため、木型倉庫のスペースも含んでいるわけで、相当の面積になる。そして融解した湯を取鍋にとってここに運び湯入れをする。そして徐冷砂おとし、整形して倉庫に入れる。

作業の近代化は、まずコシキからキューボラへ、タタラから送風機へ、燃料が松炭からコークスへという三つの変化が指標になる。送風機は明治末年から大正にかけて、キューボラが一般化するの昭和初めから戦後にかけてである。また燃料を松炭からコークスに切りかえるのも送風機の使用の少し前になる。型込めは日本の技術では焼型であったが、幕末・明治期から生型法が導入され、多くは送風機になる頃、生型を併用するようになる。したがって送風機使用の一般化する明治末から大正初期というのは、鑄物産地消長には一つのピークになっている。

したがってそれ以前では炭置場などの面積も大きく、全体ではどうしても三〇〇坪位は必要であった。第2図は大前敏保君が武蔵国児玉郡八幡山金屋村、倉林家を調査し復原したものである。これも約三〇〇坪程で母屋と、炭置場、荷造場のスペースが大きい。そして鍋座・釜座・鍍座のほか大物の風呂釜・中釜・大釜は別に場所をとっている。裏には金山様（石凝姥命）をまつり、店は正門のわきにある。製品倉庫や文書倉の他に、砂置場・ネバ置場（粘土であろう）も見える。従業員も沢山いるので米倉、みそ倉があり、職人を住わせた長屋の数も多く一六軒もある。

このように沢山の長屋を持っているのは異例で、上級の職人をのぞき単純労働に属する者は農民であった場合が多い、倉林家は最近まで鑄物業をいとなんでおり、北関東では知られた技術指導者であったから、他処の職人が修業にくる場所であったのだろう。

割に小さいけれども農具置場があり、同家が農地を持っていることを示している。鑄物師は屋敷も大きく、土地山



第3図 関東地方の鋳物師とその周辺の残存図

林を所有していた例は多いが地主だから鋳物師をはじめたのではなく、鋳物業によって蓄積した金で土地を買ったのであろう。

このような屋敷の配置関係は佐野でも真壁でも大差はなかった。少なくとも関東一円においては一般的なものと考えてよいだろう。数軒の鋳物師がある時は、大体集団をなしているのが普通で、城下町から一寸はなれた主な季節風の風下（東南）に配置されている。

倉林家でも製品（整品はあやまりであろう）小売帳場をもうけているが、最近まで三〜四人の番頭が消費地へ出かけて製品の販売また原料の購入をおこなっていた。頭梁自身が販売のために奔走した例は多く、製造・販売をかねているのが原型で、高岡や豊川のように、問屋と提携する例は一般的ではない。

六 関東地方周辺の真継鋳物師

今名寄記によって関東地方と福島県（陸奥全部）のくわしい分布と、その残存を示した図が第3図である。不明のところも数ヶ所あるが、おそらくこれは消滅しているであろう。このうち兎玉は、前記倉林家であって一九六八年、廃業している。残っているところは高崎・川越・佐野・川口・真壁の五ヶ所にすぎない。このほか関東近傍では上田・塩尻（松本から移転）などに残存鋳物師があるが、いずれにしても大部分がすでに廃滅している。

また佐野については現在八軒の鋳造工場があり、これは真継鋳物師から出た者であるが、一部は美術鋳物に他は機械工業の下請部門になって数物を作っているが、労働構成は老令化し、精度が悪く、近代機械工業地域を引きつけるだけの力がない。将来佐野に機械鋳物工場ができることはあっても、別の系統の、おそらく東京から移転してくる工

場であらう。

真壁は戦時中から機械鑄物にかわり、現在では合金鑄物になって大物の専門工場として特色を持っているがやはり従業員は老令化し、近隣地域が工業地域でないし、本来鑄物工業が機械工業を引きつけるという性格のものでないために、この鑄物工場が推進力になって真壁が機械工業地域化するようにはなり得ない。

関東地方の古い鑄物師の分布は、関東西山麓に多い。そして近江や北陸とちがって、大集団地は少なく、単独か、小集団地が多い。

佐野と川口だけが大集団でそれも今では真継鑄物師自体は大部分廃絶している。しかし名寄記の表現の問題として、山形銅町のように一人で大きな集団を代表したり、または遠敷金屋のように、作業は一軒だけで人数は二五人とというようなことは少なかったと思われる。川口はこの一二人の他に同数位の鑄物師があったが、それらは真継との関係が必要としない者であつたらう。

こうしてみると現在何かの形で機械工業地域の中にないところは、ほとんど全部絶えており、真壁と佐野だけが残っている。大体において鑄物師の位置は小さくとも城下町か陣屋のある周辺で、全くの農村地帯ではない。そのような小地方中心城市で一―三であった場合は大方幕末から明治初頃に絶えている。

これは一国一郡の独占権を失つたということより、川口などの問屋制生産品が流入してきたため、一軒や二軒で自家生産し頭梁や番頭が販売に当るような小生産では対応できなかったのである。ついで明治末から大正にかけて、送風機、コークスという技術革新の波にのれなかつたものが脱落した。送風機革命にのることができたところは、日用品鑄物から機械工業の下部構造に変わったものが多い。そうまでして戦後まで持ちこたえたところも昭和三五年以後の

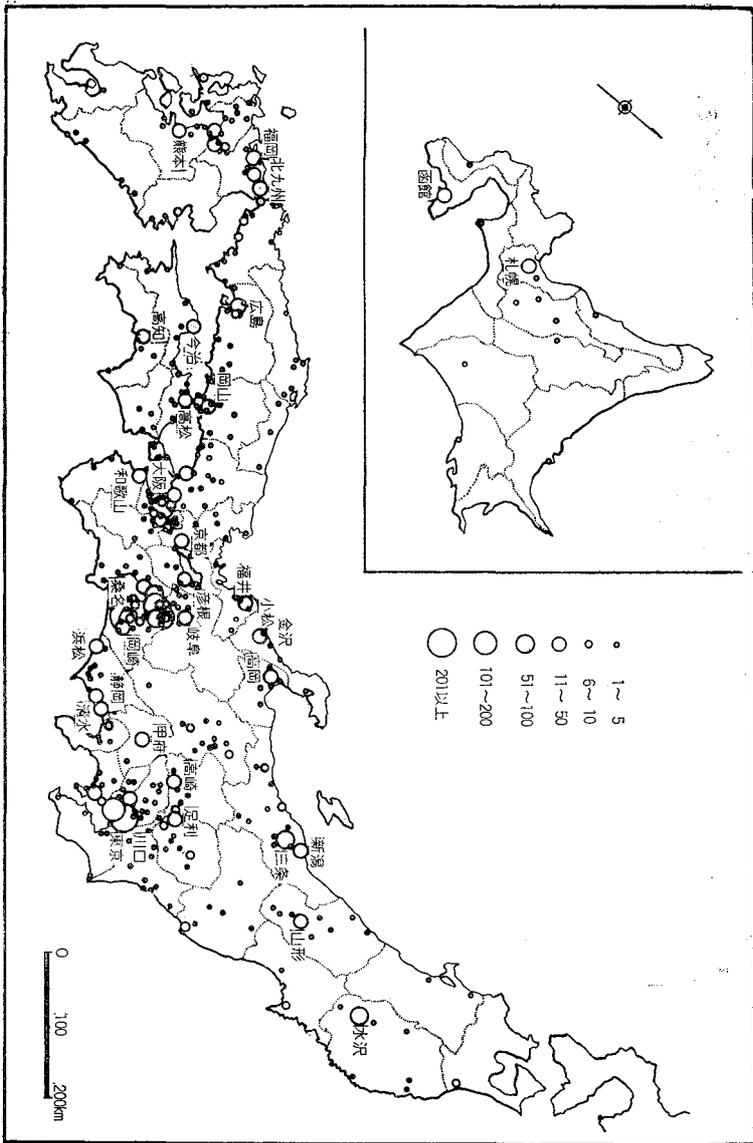
労働力不足にたえかねて廃業におもむいている。結局、京浜工業地帯につづく川口・川越、それに北関東工業地帯の高崎しか残らず、同じ北関東でも佐野鋳物は、中世以来の名声にもかかわらず、地域産業の推進力たるの任務を果していない。

七 現在の鋳物工業地域と真継鋳物師の残存地区との対比

現在の鋳物工業は少数の美術鋳物をのぞくと、主として機械工業の下請部門を形成しているものだから当然大工業地帯に多い。日本鋳物工業会の名簿（アウトサイダーも相当数記載）によって第四図をつくってみると、府県毎に埼玉四八一、愛知四〇三、大阪二三三、東京一三三、福岡（北九州）一三一、新潟一二二、静岡八七、三重八一、兵庫八〇などである。これを産地毎でゆくと、川口や東京、大阪は別格として、北から水沢七八、山形五六、西尾五九、碧南五六、桑名四七などが多い。

これらの中で東京・名古屋・水沢・北九州をのぞくと大部分の鋳物工業地域は、かつて真継の差配下にあった鋳物師のいた地域であるといえる。しかし真継鋳物師の数は山形は一人、西尾（平坂）は二人、碧南は一人という有様で川口と並ぶ大産地の桑名でも二人にすぎない。山形は前記の如く一人で集団を代表しているから問題ないが、西尾・碧南・桑名はこの通りであったらしいが、いづれも真継鋳物師自体は廃絶している。しかし各地とも、これらの真継鋳物師によって育成された職人が開業して、はじめ日用品の鍋釜をつくりそれが中京の機械工業と結合して今日の大をなしたのである。

真継鋳物師が全くなかった東京についてみよう。現在の東京鋳物業は大部分、官営工場や、平野造船所、田中工場



第 4 图 全国鑄鉄鑄物工場分布图

などで西洋式の生型の技術を身につけ、早くからコークスを使用していた。これらの工場からだんだん分離独立したものであるから、一見在来技術との関連はないようだが、実は横須賀製鉄所をはじめこれらの工場は、各地の鑄物職人を集めている。また明治中期に分離独立した者も、佐野・川口・新潟などの職人に依存している。つまり工業地域としては継続しなかったが、技術集団としては真継鑄物師をはじめ、前代の鑄物師集団が、日本に近代機械工業をおこすために相当役立ったと考えなければならない。

このような伝統工業の職人が、官営工場等で西洋式の技術を身につけた例は、品川硝子工場で、びいどろ細工人がカットグラス等をつくる技術を覚えた例もあり、他にも一つずつしらべれば例があるだろう。

まとめ

真継鑄物師の分布状況を分析すると近世の鑄物師には 1 真継家のグループ 2 江戸京都など真継と関係を持たなかったグループ 3 真継鑄物師の配下というべき真継鑄物師の勢力下にありながら登録されていない者 4 国土周辺地域の或は歩き筋ではなかったかと思われるグループの四種がある。

今1以外の所在はよく分らないが、真継鑄物師の所在地について、今の段階では砂・粘土、原料の鉄などについて立地上の特異性を検証する段階まで調査がすすめられない。俗説に鑄物師の立地が砂に関係があるといわれるが、各産地で使用された砂を比較対照したわけではなく、焼型の場合と生型の場合では条件が違うであろう。使用した粘土によっても砂の条件は変化する筈で、私は砂と共に粘土の所在と性質も調べなければならないと思う。使用された鉄の流通系統も時代によって異ったであろうし、鑄物業を大きく制約した筈である。

真継鋳物師の分布はかなりかたよっているが、これらの一部（高岡・川口・豊川）は明らかに問屋制生産の流通体系に組入れられて特産品産地となり、後に機械工業地域の下部構造に再編成された。しかし大部分の地区は現在鋳物産地としては消滅してしまつた。

しかし現在の日本の機械工業の基礎としての鋳物工業は、真継鋳物師らによって造り上げられた伝統・在来工業としての技術を基礎に、西洋式鋳物技術を受け入れて成立したものである。山形・高岡などの特産品としての鋳物産地は、在来の問屋制の生産流通体系を基礎とし、東京・大阪などの産地は技術労働力の受入れという形で前代の遺産をひきついで、その上に近代機械工業の花を咲かせた。

鍛工（鍛冶職）やプレス（かざり職）についても同じようなことが予想され、日本工業全体としても織物はじめ、前近代的生産流通体系の或程度の発展が、日本近代工業の展開を容易ならしめる条件であつたと考えなければならぬ。後進諸国の工業開発に際しても、その国固有の流通経済体系が真継鋳物師の場合における程度に近代工業の基礎となりうる程に成熟していなければ、資本や技術者を投入しても、期待した程の順調な発展は望めないであらう。

注

- ① 竹内淳彦 機械工業地域成立の基盤 歴史地理学紀要 一二（一九七〇）
- ② 板倉勝高 中居鋳物と高岡鋳物の地域的抗争 信州大学教育学部研究論集 一六号（一九六五）
- ③ 豊田武 日本商業史の研究（一九五二）
- ④ 香取秀真 日本鋳工史（一九三四）
- ⑤ 飛見文繁 高岡鋳物史話（一九五四）

- ⑥ 柳田国男 海南小記(一九三六)
- ⑦ 藏人所牒の全文は、④⑨に収録されている。文体からしてそれ程古いものではないといふことはしばしば指摘された。
- ⑧ 鋳物師由緒も⑤⑨にある。その趣旨は、近衛天皇の御悩の時、河内国日置荘鋳物師の製した燈籠の火が消えず、快愈された功によって藏人所供御人総官鋳物師と定められ、河内国天命の筋目の外の鋳物師堅く停止せられ、諸国往来、居住を免じ、路次の海河津関泊岡山市の料分例物以下の煩さ免除された。という事である。ところがその話の筋が⑤と⑨では少し違い⑨の方では、その燈籠の火で源三位頼政がヌエを退治したのだとか⑤では燈籠は一基だが⑨では一〇八基になっている。しかしこの時面傾を見た御藏民部大丞紀元弘(真継家五代、地下家伝に始而鋳物師公用之鋳物執責とある)を⑤はその頃河内国丹南郡の内を領せり、とあるのに⑨は勅使として河内国に下向したとある。後代になる程修飾が多くなってゆくのはわかるから⑤より⑨の方が新しいのであろう。しかし真継が日置荘の領家であったような言辭は、何かさしさわりがあつたのであろう。
- ⑨ 宮下史明・信濃の鋳物師(一九六四)
- ⑩ 香取秀真、鋳物師の話(一九四七)
- ⑪ 正宗敦夫編『日本古典全集』の内「地下家伝・式」(一九三七)
- ⑫ 田中隆幸編・鋳物師国、郡別名簿、大阪府南河内郡美原町大保区発行(一九六九)
- ⑬ 板倉勝高・文政二年改諸国鋳物師名寄記 流通経済論集 Vol.3, No.1(一九六八)
- ⑭ この図をはじめ本稿の図は大前敏保君の作図による。
- ⑮ 中津川章二・川口の鋳物 日本産業史大系 関東地方篇(一九五九)
- ⑯ 同じ
- ⑰ 同じ
- ⑱ 総合鋳物センター編・東海鋳物史稿(一九六七)
- ⑲ 同じ
- ⑳ 同じ

- ⑩に同じ
- ⑪ 江東区役所…江東区史(一九五七)
- ⑫ 徳川禁令考 四五 衆工 安永五申年、諸国鑄物職之事。
- ⑬に同じ
- ⑭ 大保部落が鍋宮大明神旧跡記念碑の除幕式に際して配布した「鑄物発祥の地と鍋宮大明神」と題するパンフレットにこのことが載録されている。
- ⑮に同じ
- ⑯に同じ
- ⑰に同じ
- ⑱ 柳田国男…炭焼日記(一九五二)
- ⑲ 柳田はこの手まり歌の「おいもやさん」を芋ではなく鑄物師であると考えた。芋堀小太郎をイモジと考えるのと同じである。流浪の民でなくても、出職ならば「遠からおいでた」は不思議ではない。